

# 琉球大学学術リポジトリ

## レッシング『ミス・サラ・ Sampson』における主人公サラの悲劇性について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2008-10-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片岡, 満寿男, Kataoka, Masuo, 片岡, 満寿男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002004163">https://doi.org/10.24564/0002004163</a>

## レッシング『ミス・サラ・サンプソン』における 主人公サラの悲劇性について

片岡満壽男

1

レッシングの悲劇『ミス・サラ・サンプソン』 („Miß Sara Sampson“, 1755年初版・初演)は、娘までもうけた女がいるメルフォントと駆け落ちした主人公サラが、彼女をかたきとするその女マーウッドに毒殺されるという話である。レッシングが狙っていたのはヤーコプスによれば主人公サラの徳を「不幸の中で輝かせる」ことであり、「苦しみと道徳的偉大さとのコントラスト」を浮かび上がらせて、悲劇の終わりで感動の頂点に持っていくことであった<sup>1)</sup>。

第三幕第3場でサラのところに父サー・ウィリアムから召使のウエイトウエルが赦しの手紙を持って来る。これをサラは読まないと言い、読まない理由として不幸についての考えを述べる。

ひとつは、父の赦しがうわべだけである場合。この場合には情に流されて赦したに過ぎないから父は不幸になり、その不幸にサラが同情して彼女も不幸になるというもの。

今ひとつは、父親が赦していた場合。この場合にはサラひとりの不幸で済むというもの。

第三幕第3場は父親の赦しの手紙についてのサラと召使ウエイトウエルのやり取りで盛り上がる。そしてサラの取り越し苦労から彼女に起こりうる不幸の型が上記のように二つ呈示されたことになる。

ともかくサラの不幸への傾向を見て、観客は心の準備をする。見せ所は勿論サラがマーウッドと対決する第四幕第8場の筈である。ところがここでサラは意外にも苦しめられておらず、「二人の女性の間の盛大な場面 (IV, 8) は感動的なやり取りのための余地を残さない」という有様である<sup>2)</sup>。

本論では、サラは本当には不幸でないのではないかと、そして不幸でないとするればどうしてかを問うていくことになる。その際、サラが復讐されるに至る過程で、第三幕第3

場で呈示されたような二つのタイプの不幸の実際はどうだったかを検証する。傍ら、レッシングの同情観とアリストテレスの悲劇観を瞥見する。

2

第三幕第3場、父サー・ウィリアムの手紙を読む前に、サラはその手紙が激した父親のそれであったならと言い、更に父が軽蔑でもしてくれればその場合サラは、

Ganz allein ohne ihn unglücklich zu sein

全くひとりだけで彼にはかかわりなく不幸であること

(III, 3; S.44)

になり、サラはその方が良いと思っている。即ちこの戯曲の前史として、父サー・ウィリアムが彼女の過ちを怒ったと分かる。それで彼女とメルフォントとの駆け落ちになったのだった。サラは不幸である。そして父が赦してくれるとなっても、それがうわへの赦しであったなら、赦してもらわない方が良い。不幸のままで良いと思っている。

ヨーロッパでもかつては婚前交渉は罪悪視され、うまく収まりがつかなければ当事者の一方である女性は不幸を甘受することが多かったようである。『ミス・サラ・サンプソン』でもその事情は変わらない。主人公のサラが「過ち」(Fehltritt)に対して取った姿勢についてミヒェルゼンの詳細な分析がある。それによればサラは「婚姻外の同棲で処女を捧げることを全く重大にも罪だと」「感じていた」と云う<sup>3)</sup>。

主人公サラと彼女をかたきとするマーウッドが対決する第四幕第8場では「過ち」もその争点のひとつである。マーウッドはサラに対して正体を隠し、レイディ・ソームズを名乗り、マーウッドについて、即ち自分のことを他人事のように弁じ立てる。そのレイディ・ソームズによれば、マーウッドはメルフォントの訪問が重なるうちに、ついつい友達関係の域を越えて出来てしまったのだそうである。レイディことマーウッドは「サンプソン嬢ご自身がこのことは誰よりもよく思い知っていらっしやるでしょう」(S. 73) と、矛先をサラに向ける。マーウッド同様にメルフォントと婚姻外交渉のあることを衝かれて、サラは「ああ」とうめく。

二人の対決の大詰めでレイディ・ソームズが怒りを露わにして、マーウッドだぞと正体を現す。それはサラを責めても成果が引き出せそうにないと分かったからである。な

ぜか。まずは婚前交渉というトピックを追ってみよう。サラが「過ち」のことを単に「誤り」(Irrtum)にすぎないのであって、「重罪」(Verbrechen)ではないとするくどりは、

S a r a ... Ach, Lady, wenn Sie es wß ten, was für Reue, was für Gewissensbisse, was für Angst mich mein Irrtum gekostet! Mein Irrtum, sag ich; denn warum soll ich länger so grausam gegen mich sein und ihn als ein Verbrechen betrachten? Der Himmel selbst hört auf, ihn als ein solches anzusehen; er nimmt die Strafe von mir und schenkt mir einen Vater wieder ...

サラ ... ああ、レイディ、何という悔い、何という良心の呵責、何という不安を私の誤りが私に費やさせたことか、あなたが知ってくれたらいいでしょうに。私の誤りと私は言います。というのは、どうして私はこれ以上長いこと自分に対してそんなに残酷でいるべきなのでしょう、そしてその誤りを重罪と見なすべきなのでしょう。天なるお方ご自身が誤りをそのようなものと見なすのをお止めになります。そのお方は罰を私から免除して下さい、私に父親を贈り返して下さい ... (IV, 8; S. 76 – 77)

サラはレイディ・ソームズことマーウッドの責めを全く受け付けない。はじめは後悔、良心の呵責、不安。そうしたものに苦しめられたというものの、今は「重罪」も赦されたように思っている。そもそもここでサラを「過ち」で責めようとするには時点が良くなさすぎる。どうしてこんなに気の抜けた対話をさせるのか。サラは既に父親の赦しの手紙を読んでいるのだ。それはサラが益々メルフォントとの結婚に近づいているということ。サラに身を引かせなければならないというのに。だから打つ手に窮して、マーウッドだぞと正体暴露に及んだのであった。

サラが「過ち」は「誤り」としてそれが「重罪」ではないと主張するのは、マーウッドに対してだけではない。メルフォントに対しては「過ち」を一方では「とが」(Vergehen)とか「罰せられる」(strafbar)とか言いながら、愛があればと肯定している(IV,1; S. 56)。これについてミヒエルゼンの見るところ「改悛の気持ちを全く感じていない」としている<sup>4)</sup>。

それどころか父親に対してさえサラは強い姿勢で臨もうとしている。第三幕第3場で父の赦しの手紙をめぐってウエイトウエルに、

S a r a . . . Wenn er mir vergibt, so muß er mein ganzes Verbrechen vergeben und sich noch dazu gefallen lassen, die Folgen desselben vor seinen Augen fort dauern zu sehen.

サラ. . . もし彼が私を赦すという場合には、彼は私の重罪の全てを赦さなければなりません。そしてその上その結果が彼の目の前に引き続きあることを甘んじて見なければなりません。 (III,3; S46)

ここでは確かに「過ち」は「重罪」と言われている。しかし、うわべだけでなく全てを赦しなさい、そしてその結果としての結婚も認めなさいと言うのである。

その一方でサラは世間の価値観で「過ち」を罪だと認め、悔い改めてもいる。第五幕第9場で父サー・ウイリアムに再会したときには、「罪ある、悔い改めている、罰せられた娘」(eine schuldige, eine reuende, eine gestrafte Tochter; S. 89)と言っている。

ミヒェルゼンはサラの中に「矛盾する価値評価」<sup>3)</sup>を見ている。一方に「改悛の気持ち」を全く感じていない」価値観があり、他方に世間的な価値観、即ち過ちを罪とがと見なす価値観があるということである。

こうしてサラの場合について次のように言うことが出来るだろう。「過ち」に父親が激して出て行けと言った場合、彼女は確かに世間的には不幸になる。しかし彼女はこのような不幸を本当のところは不幸だとは思わないだろう。

### 3

サラの考える不幸には世間的な不幸の他に、父親の不幸に同情して自分も不幸になるというのがある。

Wenn mein Vater durch mich unglücklich sein muß, so will ich selbst auch unglücklich bleiben.

もし私のお父様が私によって不幸であらざるをえないなら、私自身も不幸なまま

それは赦しの手紙を受け取らない理由のひとつをなしていたのだった。赦しがうわべだけである場合には、父が情に流されて赦したに過ぎないから、結局は不幸になり、父のこの不幸に同情してサラもまた不幸になるからというのであった。

サラは世間的な不幸を不幸と思わないということであった。すると他人の不幸に同情できるというサラの傾向は、『ミス・サラ・サンプソン』の悲劇性を考える上で期待が持てそうである。それにしてもサラがマーウッドに同情するということはありうることだろうか。

マーウッドは娘までもうけた仲のメルフォントをサラに奪われたのであったが、いわば泥棒猫にも等しいサラに第三者が事情を噛んで含めれば、同情くらいして頂くのが人の道でありそうな様子。

第四幕第8場、そのような第三者レイディ・ソームズとしてマーウッドはサラに対峙したのだった。レイディ・ソームズは「不幸なマーウッド」(die unglückliche Marwood IV, 8; S. 74)の身の上話をしてサラの同情を引き、サラに身を引かせようとする。そのメインとなるのがメルフォントに起こった遺産相続の話めぐり、その相続に彼が与れるようにマーウッドが身を引こうとしたというものである。

レイディによれば、メルフォントがマーウッドと結婚しようとしていたまさにその時、彼はいとこが亡くなったという報せを受け取る。そのいとこは全財産を条件付きでメルフォントに遺すとしていた。それはメルフォントが彼には遠縁に当たる女性と結婚するならばという条件だった。こういうことを密かに知って、マーウッドは姿を消したという。その際の置き手紙はおよそ、身を引きますという内容だった。しかし、姿を消したマーウッドをメルフォントは見つけ出し、二人は話し合いをして、次の点で意見の一致を見たという。それは遺産相続の条件にあった結婚の相手となるべき「遠縁の女性が長い逡巡に業を煮やして仕方なく和議を申し出るまで」(S.73)、自分たちの結婚は見合わせるという点で。すると結果としては、マーウッドは身を引いた訳ではないのである。

ところでメルフォントとマーウッドが結婚しないままだったことについては、メルフォントの結婚忌諱(Ehescheu)のせいだとブリュッゲマンが指摘している<sup>6)</sup>。即ち、遺産相続に与るためというのを口実にメルフォントは先にはマーウッドとの、そして今は

サラとの結婚を延ばし延ばししていたというのである。メルフォントの結婚忌諱の傾向は第四幕第2場のモノローグに吐露されるが、それが実害を伴ったかどうかについてはテキストから確証を得られなかった。例えばレイディ・ソームズことマーウッドは「要するに愛がメルフォントに夫の権利を与えましたが、メルフォントはかなり長いこと愛を法律によって有効ならしめることを必要だとは思っていませんでした」(IV, 8; S. 74)と言うのだが、それによってマーウッドとの結婚が沙汰止みとなったのか、そして遺産相続はそのための口実だったのかを検証してみよう。

遺産相続の話が出た時にメルフォントがどう考えていたかについてレイディ・ソームズは話す。

Marwood ... Er war willens, ihr von dieser Erbschaft eher nichts zu sagen, als bis er sich derselben durch sie würde verlustig gemacht haben.

マーウッド、... 彼は遺産相続を彼女のことがあるのでふいにしてしまうかもしれないが、それまでは彼女に遺産相続については何も話さないつもりだったんです。(IV, 8; 72)

メルフォントはマーウッドと結婚しようとしていたのだった。引用に「彼女」とあるのはマーウッドのことである。すると彼女に遺産相続について、またその条件について話さない、相談しないということは、彼がマーウッドと結婚するのを既定のこととして腹を据えたということではないのか。即ち、遺産相続をふいにしてしまうだろうと覚悟したということではないのか。

まさにこのメルフォントの決心についてマーウッドは密かに情報を仕入れ、身を引きますとの内容の手紙を残して姿を消したのだった。こう話すレイディソームズに対してサラは、

Sara. Weil sie sich finden lassen wollte, ohne Zweifel

サラ、 彼女は見つけてもらいたいと思っていたのよ、間違いないわ。(IV, 8; S.73)

とコメントしている。自分が身を引いて姿を消してもメルフォントは自分を追いかけて

くと、マーウッドは計算済みだった。そうサラは言いたいのである。身を引くというのは口先だけだったんだ、同情は出来ないよということである。そしてマーウッドが計算高かったとすれば、こうは考えられないだろうか。メルフォントが姿を消したマーウッドを追いかけたのが結婚を期してのことだったとすると、結婚を引き廻すように仕向けたのはマーウッドの方だったのではないのか。引き廻しによってメルフォントを遺産の相続に与らせ、それを自分に貢がせるというのはなかなか良く出来た筋書きであり、可能性としてもサラが現れる前は十分だったといえる。マーウッドがそのような筋書きを思いつくかどうかについては、それは既にそれが習い性となった彼女の生き方そのものとも考えられるのである。第二幕第3場でマーウッドはメルフォントに銀行券や宝石をお返ししたいと言うくだりがあるが、随分貢がせたものだと言われるのである。

こうして第四幕第8場を見てみるとサラが同情して苦しむなどありそうになく、むしろマーウッドの空回りがおかしいくらいである。しかもつぶさに読んでみれば、苦しんでいるのは実はマーウッドと分かる。あるいは懲らしめて、あるいは同情を引いてサラに身を引かせようという目論見が空回りするにつれて、サラを殺すしかないところへと追い込まれていく。サラに皮肉が効く。メルフォントに入る遺産が狙いでしようとはっきり言ったわけではない。しかしマーウッドが遺産が狙いの自分の行動を言い繕おうとするや否や、ちくちくと皮肉を言うのである。観客の同情が犠牲者としてのサラに向けられねばならないという時に、追い詰められて苦しみ、ちくちく皮肉で苛められるのはマーウッドの方なのである。

#### 4

「不幸なマーウッド」について、その身の上話について、サラは全く同情を示さなかった。しかし「不幸な娘」(eine unglückliche Tochter, IV, 8; S. 74)に話が及んだ時、サラは「恐ろしい報せ」(„Schreckliche Nachricht!“)と反応を見せている。マーウッドにメルフォントとの間にもうけた娘がいるとは知らなかったようで、単なる驚きとも取れるが、この後の劇の展開、及び一般的にこういう場合のことを考えて見れば、単なる驚きとも思えない。レッシングに驚怖(Schrecken)は同情の始まりというのがあり<sup>7)</sup>、すると「不幸な娘」にたいする同情の端緒を認めてよいかもしれない。

「不幸な娘」の取り扱いについては子殺しのモチーフとして捉えると分かり易いだろう



う。「不幸な娘」アラベッラをマーウッドは殺してやると言うのだったが、子殺しによって男への復讐の効果を狙った話は、エウリピデスの悲劇「メディア」に由来している。レッシングの芸術評論『ラオコーン』に古代の画家ティモマコスの「幼児殺しのメディア」という作品に触れたところがある。そしてその絵に描かれたのが「母親としての愛情がまた嫉妬の気持ちと争っているときのメディア」である点を高く評価している<sup>9)</sup>。即ちレッシングはメディアを題材とした絵で、残酷無比なメディアにも母親としての愛情があったとして、母親としての愛情が殺意と争うところを描いたものを高く評価するのである。一方、復讐に取り付かれて「狂乱の絶頂にあるメディア」を描いた絵には、即ちメディアの母親としての愛情が感じ取れないような作品には嫌悪感を示している。

アリストテレスもエウリピデスの悲劇『メディア』での子殺しによる悲劇性には関心を寄せている<sup>9)</sup>。彼の『詩学』からは『メディア』の悲劇性の多くが子殺しに負っているとさえ読み取ることができそうなのである。

アリストテレスの悲劇の定義のうちで、悲劇が「あわれみと恐れをひき起こす」とされているのは良く知られている。そしてアリストテレスによれば、恐れとあわれみの効果を作り出す恐ろしい出来事とは、近親関係にある相手の殺害、乃至はその未遂を以て最上としている<sup>10)</sup>。その一方で、とりわけ近親関係にある相手の殺害が遂行されたものについては、憤慨させるものがあることも指摘する。ただアリストテレスの場合には、この憤慨がレッシングの言っているような同情には結びつかないようで、憤慨させるほどにも恐ろしい出来事だからこそ悲劇たりうると読める。

『ミス・サラ・サン普森』のアラベッラも『メディア』の子供たちも、一方は養子が決まり、一方は殺されるという違いはあるものの、悲劇的効果を高めるのに大きなはたらきをしている。それどころか『メディア』の場合には子殺しがなければ、アリストテレスの要求する悲劇性に感じられないものと思われる。翻って『ミス・サラ・サン普森』の場合も、アラベッラは「観客の心に消しがたい印象を残す」と言われている<sup>11)</sup>。

さて、サラが「不幸な娘」のことを聞かされたとき、「恐ろしい報せ」と言ったこと、そしてその驚き恐れる感情が同情の端緒ではないかとは既に指摘したところである。しかしこれによってサラが母娘の不幸に同情するというに至らない。むしろサラはマーウッドによる娘アラベッラの扱い方に憤慨していたのではないか。一例をあげてみよう。サラが、

と言うのだが、これはどう訳すべきか。Pfund はアラベッラのこのように、しかも Pfund には「しるし」の意味があり、例えば「愛のしるし」というように用いられる。だから「マーウッドが愛のしるし、つまり子供のことを話していましたよ」と解して、特に奇異なところはない。

一方 Pfund には「質種」の意味がある。そして第五幕第 10 場でマーウッドの書き付けが読み上げられるのだが、そこでマーウッドが逃亡をしようとしていること、そして追っ手をかけられないためにアラベッラを「人質と見なすつもりだ」と知らされる。Geisel (人質) を辞典で引けば、これが Pfund (質種) の一種と分かる。すると引用の和訳は「マーウッドが、質種となった子供のことを話していましたよ」とすることも出来る。そしてアラベッラについては「マーウッドの掌中の道具」という指摘もあるのだから<sup>12)</sup>。

メルフォントが「不幸な女の子」(die kleine Unglückliche, S. 83) のことで、非難されるべきは母親の方だと主張するが、サラはこれに異議はなさそうである。メルフォントとサラはアラベッラについてマーウッドの「質種」だという文脈で話し始めているのだ。そしてメルフォントが「不幸な女の子」と言ったことに対して、サラはその娘の境遇への彼の同情を読み取ったようで、それについて「肉親の共感」(die Sympathie Ihres Blutes, S. 83)という表現をしている。「共感」と訳した Sympathie はギリシャ語に由来するが、これはドイツ語では Mitleid が当たる<sup>13)</sup>。ところで「不幸な女の子」への「共感」はメルフォントのものでサラ自身のものではない。サラがアラベッラを不幸だ、かわいそうだと感じたのかどうか。

第五幕第 4 場ではこの後、サラはメルフォントに自分を彼の娘の母親代わりにしてくれと提案する。「教育して自分の女友達にする幸福を私にお恵み下さい」(S. 83) と言う。今やサラは不幸になるどころか、「幸福な日々」(S. 83) を夢見ている。その日々には、父親はサラに「私の子どもらしい畏敬」を求め、夫はサラに「親密な愛」を求め、アラベッラはサラに「行き届いた友情」を求める。サラはアラベッラの幸福な未来を夢見るがゆえに現在の不幸に対する同情や共感の類は不要のものになったのか。

むしろ次のように解すべきだろう。サラがマーウッドに代わってアラベッラを引き取り、この娘の教育を引き受けることは、アラベッラの現在の不幸に対する同情や共感に発するものだろう。しかしその行為は、メルフォントの父親としての共感、即ち血縁の共感や同情を越えていくことになる。そしてサラは血縁を越えた愛と友情の共同体を夢見ていることになる。かくして復讐が赦しに取って替われ、人類愛がうたわれる。レッシング後年の戯曲『賢者ナータン』(„Nathan der Weise“)につながるテーマである。こうしてサラの同情はどうやら不幸への同情であることを止めたのであるらしい。

ここで他の人々の、一般の同情について瞥見しておこう。サラがうたう人類愛的なビジョンをひとりの観客として感動して聞いていた者がいる。メルフォントである。ところがこの後すぐサラは毒によってようやく本格的になった苦しみを訴える。メルフォントは驚愕する。そしてこの観客は彼の心の動きを報告する。即ち「嘆賞から驚怖へと何と突然気持ちが変わることよ」(„Welcher plötzliche Übergang von Bewunderung zum Schrecken!“, S.83)。すると一般の観客も、うたうサラについては嘆賞を、苦しむサラについては驚怖を指示されるということだろうか<sup>14)</sup>。とまれ新たな不幸が、同情の種が芽生えたらしい。

レッシングは悲劇『ミス・サラ・サンプソン』出版の翌1756年フリードリヒ・ニコライに宛てた手紙(11月中とあるが日付なし)でこう書いている。

Nun zur Bewunderung! Die Bewunderung! O in der Tragödie, um mich ein wenig orakelmaßig auszudrücken, ist [sie] das entbehrlich gewordene Mitleiden. Der Held ist unglücklich, aber er ist über sein Unglück so weit erhaben, er ist selbst so stolz darauf, daß es auch in meinen Gedanken die schreckliche Seite zu verlieren anfängt, daß ich ihn mehr beneiden, als bedauern möchte.

さて、嘆賞についてだ。嘆賞。おお 悲劇においてはだ、少しご神託を垂れるように言わせてもらえば、嘆賞はなくても済むようになった同情である。主人公は不幸であるが、しかし、それだけ彼は彼の不幸をこえて崇高である。不幸が私の頭の中からも恐ろしい面を無くし始める、そのことを主人公自身はいたく誇りに思うので、私は彼をあわれむよりも妬みたくなる程だ<sup>15)</sup>。

これをサラに当てはめてみれば、サラは世間的には、あるいは肉体上は不幸であるが、しかし不幸をこえて崇高である。観客は彼女の不幸に同情するよりは、むしろそれを嘆賞せざるを得ないとなろうか。

同じ手紙でレッシングは「嘆賞」(Bewunderung)のことを「なくても済むようになった同情」として「同情」(Mitleid)の終わりに位置付けている。そして同情の始まりには「恐れ」あるいは「驚き」の Schrecken を置いている。これらすべてがいわば広義の「同情」に属するとするのが面白い。そしてそれに従うなら嘆賞・賞賛に終わる悲劇も広義の同情の枠内の感情を呼び起こすという理屈で、立派な悲劇であると言おうとしたのだろうか。

5

第四幕第8場の終わりでサラが自らを「不幸なサラ」(unglückliche Sara)と呼ぶところがある。この不幸はよく吟味すべきだと思われるのでその状況を見ておこう。

S a r a (die voller Erschrecken aufspringt und sich zitternd zurückzieht). Sie Marwood? – Ha! nun erkenn ich sie – nun erkenn ich sie, die mörderische Retterin, deren Dolche mich ein warnender Traum preisgab. Sie ist es! Fieh, unglückliche Sara! ... Itzt dringt sie mit tötender Faust auf mich ein! Hilfe. (Eilt ab.)

サラ (驚怖の余り飛び上がり、震えながら元に戻る)。あなたがマーウッドですって。へっ。今分かったわ、彼女のことが。今分かったわ、彼女のことが。あの助けてくれた女が、人殺しの。警告で見た夢の中では私はその女の短刀に殺られていたんだっけ。彼女なんだ。不幸なサラよ、逃げるんだ。... 今あの彼女が殺そうと握りこぶしで私に迫ってくるわ。助けて。(急いで去る。)

(IV, 8; S. 77)

サラの恐怖は、マーウッドだぞという正体暴露による恐怖に留まらない。今彼女は第一幕で話していた恐ろしい夢のことを思い出す。夢の中で自分を短刀で刺した女が目の前

のマーウッドと一致すること、及び目の前のマーウッドが自分に迫ってくるのが、夢にあったように自分を殺そうとしてのことだとの恐怖にとらわれる。驚き怖れ、今や殺されるという恐怖感がサラに「不幸なサラ」と言わせたのだろう。

第五幕第1場が開くとサラは弱々しくなっている。サラはその後「気絶」(Ohnmacht)したというのである。するとこう問わざるをえない。サラが気絶したのは驚いたり恐怖にとらわれたりしたからというだけだろうか。この気絶は突発的なものに留まらず、それまでの苦しみが高じてのものではないのか。しかもサラは第一幕で話していた恐ろしい夢のことまで思い出していたではないか。

残念ながら「気絶」のことは間もなく忘れられてしまう。というのは第五幕第5場でマーウッドの書き付けが届いて、サラが毒をもらわれたと判明するからである。これによって少なくとも第五幕初めのサラの苦しみが高まったところ毒物学的な効果であったことになる。更に「気絶」に至る原因を驚怖という突発的なところに留め置かざるを得なくなる。そうすると「不幸なサラ」と言ったのは人殺しへの恐怖感に一時的に捉えられて、私は殺される、不幸だ、そう思っただけということになってしまう<sup>10)</sup>。

さて、マーウッドの復讐の毒によりサラは不幸に転落するのであった。しかし不幸に超然としているのがレッシングの求めた悲劇性である。肉体は死んでも精神は毅然としているということなのだ。

第五幕の毒物による苦しみ、あるいは毒物の作用については、その様子をサラの口から、動作から、あるいは相手役の指摘から刻々知らされる。それは毒物作用の因果の連鎖を形成することになるが、そこに主人公サラの苦しみを、不幸を、それによって表そうという作者の意図が働いているのは自明である。

ところで「毒」(Gift)に比喩的な用法が見られ、第四幕第8場でサラがマーウッドのことで「毒ある舌」(eine giftige Zunge, S. 76)と言っていた。毒舌と言おうか、毒は、人の心を傷つけるもの、人の心を煽るものという程の比喩的な意味である。そして今、毒物の作用による事件の進行のさなか、毒についての文字通りの意味なのか、それとも比喩的な意味なのかを迷わせる個所に出くわす。

S a r a ... Hätte er mir doch gefolgt und den Zettel nicht gelesen! Er konnte es ja wohl denken, daß er das letzte Gift der Marwood enthalten

müsse. —

Betty. Welche schreckliche Vermutung! — Nein; es kann nicht sein; ich glaube es nicht. —

サラ. ... もし彼（メルフォント＝訳者）が私の言うことを聞いて、書き付けを読まないでいてくれたら良かったのに。ほんとに彼は良く考えてみるのが出来たんですよ、それ（書き付け＝訳者）がマーウッドの毒を含んでいるに違いないってことを。

ベッティ. 何と恐ろしい推量でしょう。 — いいえ。そんなことはありえません。私はそうは思いません。 (V, 6; S. 86)

書き付けとは、前の場でメルフォントがマーウッドからの書き付けを召使ノートンを経由して受け取ったものである。引用では、サラの召使ベッティは「マーウッドの毒」を文字通りの毒物学上の毒と受け取っている。彼女は、これまた前の場でメルフォントに毒物のことでわけも分からず怒られたことが影響しているのか。しかもこの時点で、自分がひょっとして知らずにマーウッドのサラへの毒の投与に関与させられてしまったのではないか、そういう疑念がベッティに芽生えたように見える。だからベッティは、ありえませんかと断言しているのではないか。マーウッドの毒は私が匂付け薬と思いついでサラお嬢様に投与したのだとすれば、それが書き付けにあるということはありません、と言いたいのだろう。

書き付けに毒物学上の毒が実際には無かったとすると、それをあえて「マーウッドの毒」と言ったサラは一体何を考えていたのか。ヒントはその前の文にあるだろう。「もしメルフォントが私の言うことを聞いて、書き付けを読まないでいてくれたら」 — そうしたら彼はマーウッドの毒にやられなかったでしょうに、マーウッドの憎しみに煽られずに済んだでしょうに、と解することが出来るではないか。先に「毒ある舌」の毒が比喩的な毒であったように、「マーウッドの毒」も、人の心を傷つけるもの、人の心を煽るものという程の比喩的な意味を強く含意している筈である。ちなみにマーウッドの書き付けは毒（毒物学上の毒）をサラにもったのは私だよという挑発的な内容で、これを読んだメルフォントは動転したのだった。「マーウッドの毒」の挑発に乗せられたことになる。

話を前の場に戻そう。メルフォントがマーウッドの書き付けを受け取ったのは、第五幕第5場のことだった。「それを読んでみましょうか、ミス」というメルフォントに対して、「あなたがもっと落ち着いてからでしょうね」とサラは応じていたのだった。今は読んで駄目ですよと暗に諭している。もっと落ち着いてからとサラが言うのは、メルフォントがこのとき既に興奮していたからである。サラがマーウッドに痛い目にあわされたことを知って、興奮していたからである。「復讐」(Rache, V, 5; S. 84 ここは「仕返し」くらいの意味か)を唱えるほど興奮して治まらない様子だったからである。

サラは毒物の作用が自分の体内で進行しているのをよそに、復讐の連鎖に巻き込まれないようにメルフォントを諭していることになる。そして他人にそう言うばかりでなく、自分でもマーウッドの書き付けを読もうとはしない。こうして「マーウッドの毒」の謎も解けてきたようである。それは — サラの死はマーウッドの毒薬に屈したことを意味する。しかし復讐へと憎しみを煽る毒には屈しない、となろうか。サラはすると不幸であると同時に、不幸に屈しなかったことになる。

\*

使用テキストは Gotthold Ephraim Lessing: Miß Sara Sampson. Ein Trauerspiel in fünf Aufzügen. Anmerkungen von Veronica Richel. Nachbemerkung von Erwin Leibfried. Stuttgart 1994 (Reclam).

引用は幕場とページ数を次のように表示した： (IV, 8; S. 77)

#### 註

- 1) Jacobs, Jürgen: Lessing. Eine Einführung. München und Zürich 1986, S. 42.
- 2) Daunicht, Richard: Die Entstehung des bürgerlichen Trauerspiels in Deutschland. Berlin <sup>2</sup>1965, S. 291.
- 3) Michelsen, Peter: Der unruhige Bürger. Studien zu Lessing und zur Literatur des achtzehnten Jahrhunderts. Würzburg 1990, S. 204.
- 4) Ebda, S. 204.
- 5) Ebda, S. 205.

- 6) Brüggemann, Fritz: Lessings Bürgerdramen und der Subjektivismus als Problem. In: Gerhard Bauer / Sibylle Bauer (Hrsg.): Gotthold Ephraim Lessing. Darmstadt 1968, S. 88ff.
- 7) Petsch, Robert: Lessings Briefwechsel mit Mendelssohn und Nicolai über das Trauerspiel. Darmstadt 1967, S. 53. 書簡のこの個所でレッシングは驚怖とか同情とかについて、観客のそれとして論じている。
- 8) レッシング (斎藤栄治訳) 『ラオコオン』昭和45年, 47~48 ページ。
- 9) アリストテレス (藤沢令夫訳) 「詩学」『世界古典文学全集 16 アリストテレス』昭和41年, 29 ページ。
- 10) 同書, 28 ページ。
- 11) Daunicht, Richard: Die Entstehung des bürgerlichen Trauerspiels in Deutschland, S. 292.
- 12) Ebd.
- 13) Mitleid と Sympathie との関係については、シャーデヴァルトが Mitleid とギリシヤ語の  $\sigma\rho\mu\pi\alpha\sigma\chi\varepsilon\lambda\upsilon$  などの対応関係で論じている。(ヴォルフガング・シャーデヴァルト (田村・浜崎訳) 「怖れと憐れみ?」『琉球大学語学文学論集』第36号1991年, 92-94 ページ)。
- 14) レッシングはこのような台詞をト書きを補うものとして考えていたらしい (Michelsen, Peter: Der unruhige Bürger, S. 185ff)。
- 15) Petsch, Robert: Lessings Briefwechsel mit Mendelssohn und Nicolai über das Trauerspiel, S. 53.
- 16) サラは罪意識から解放されてはいないとするのをもたもったもな見方である。大きな論拠としては、サラが赦しの手紙を読んだ後の第四幕になっても幸福が信じられないと言っていることがあろう。幸福が信じられないのは、彼女に後ろめたい気持ちがあるからだとする意見もある (Vgl. Manfred Durzak: Äußere und innere Handlung in „Miß Sara Sampson“. Zur ästhetischen Geschlossenheit von Lessings Trauerspiel. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 44 (1970), S. 55)



## Zusammenfassung

### Die Tragik der Titelheldin in Lessings „Miß Sara Sampson“

Masuo Kataoka

Im Trauerspiel „Miß Sara Sampson“ wird die Titelheldin von ihrer Nebenbuhlerin Marwood vergiftet. Hieraus entstehende Leiden und der schließliche Tod bedeuten Saras Unglück. Es ist zu fragen, ob Sara in ihrer Auseinandersetzung mit Marwood im achten Auftritt des vierten Aufzuges auch noch psychisch gequält wird. Die Bewertung von Saras Leiden erfolgt nach einem Modell zur durch die Unglücklichkeit anderer zu verursachenden eigenen Unglücklichkeit. Denn in III, 3 erfahren wir, dass Sara aus dem für ihren glücklichen Vater zu empfindenden Mitleid gern unglücklich bleiben will. In III, 3 findet sich die ihr wegen ihres Fehltritts zugeschriebene Unglücklichkeit als ein anderes Modell, das zur Bewertung von Saras Leiden verwendbar ist, weil ihr dieser Fehltritt auch in IV, 8 eben durch Marwood vorgeworfen wird.

In diesem Aufsatz wird durchgehend die Frage gestellt, ob Sara wirklich unglücklich ist. Saras angestrebte, durch Mitleid erweckte Unglücklichkeit würde nämlich nicht aufrichtig werden, wenn sie nicht unter Tränen starke selbstquälerische Gedanken erlebte. Während des Eintretens der toxikologischen Wirkung des Giftes im letzten Aufzug des Dramas ist Sara zwar unglücklich, aber, innerlich gesehen, überwindet sie ihr physisches Unglück. Diese spezifische Tragik Saras wird auch unter Berufung auf Lessings Begriff der „Bewunderung“ erörtert.

Im Zusammenhang mit der Figur der „unglücklichen Tochter“ Arabella, bezogen auf das Kindermord-Motiv in Euripides' „Medea“, werden auch gewisse Hinweise aus Aristoteles' „Poetik“ einbezogen.